相補フィルタで 6軸IMUの姿勢推定

人類文明継続装置 輪廻 上口

監修: 矢口 裕明

(博士(情報理工学))

注意事項

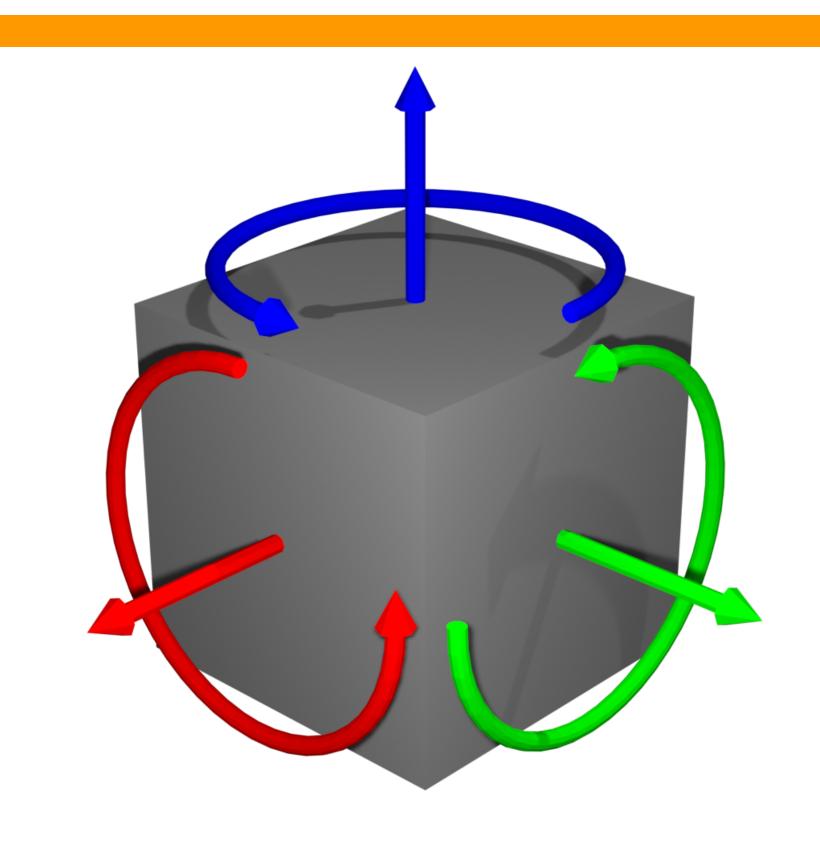
- 理系大学で学ぶ程度の数学知識を必要とします。
 - 線形代数は必須!
- これまでの講義で使ってきたものを一通り使います。
 - 同次座標変換
 - クォータニオン
 - AngleAxis
 - ラプラス変換、Z変換

6軸112は?

IMU: Inertial Measurement Unit 自分の運動を計測できる装置 6軸の場合、



- 3軸加速度計
- 静止状態では鉛直上向きに1Gがかかる 9軸の場合、
- 十 3軸地磁気計



姿勢推定問題

Q: 6軸IMUの現在の姿勢(回転角度)を求めよ。

- ->角速度を積分すれば できるのでは?
- ->加速度から 重力方向を推定すれば できるのでは?

計測結果には必ず誤差が乗る。

計測結果から真値を求めることは原理的に不可能。ただし、誤差の分布や傾向に基づいて最小化はできる。

単純計算だと・・・

角速度積分では、 誤差ごと積分するため 低周波ノイズが乗る。

加速度からの推定では、静止状態が前提となり高周波ノイズが乗る。

相補フィルタ (Complementary Filter)

2つの異なる手段で同じ量を推定。 それぞれに伝達関数の和が1となるような フィルタをかけて足し合わせる。 (周波数空間内の話であることに注意)

$$X_c(s) = G(s)X_a(s) + (1 - G(s))X_b(s)$$

例えばIMUの場合、 角速度積分から推定した姿勢にHPF, 加速度から推定した姿勢にLPFを適用。 同じカットオフ周波数のLPFとHPFは 相補の関係にある(伝達関数の和が1)。 詳細は[1]

6軸IMUの相補フィルタ

導出過程は[2]がより詳しい。

(補足)カットオフ周波数

IMUの相補フィルタ

$$R_{y}(\theta_{y})R_{x}(\theta_{x}) = \begin{bmatrix} \cos\theta_{y} & 0 & \sin\theta_{y} \\ 0 & 1 & 0 \\ -\sin\theta_{y} & 0 & \cos\theta_{y} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & \cos\theta_{x} & -\sin\theta_{x} \\ 0 & \sin\theta_{x} & \cos\theta_{x} \end{bmatrix}$$
$$= \begin{bmatrix} \cos\theta_{y} & \sin\theta_{x}\sin\theta_{y} & \cos\theta_{x}\sin\theta_{y} \\ 0 & \cos\theta_{x} & -\sin\theta_{x} \\ -\sin\theta_{y} & \sin\theta_{x}\cos\theta_{y} & \cos\theta_{x}\cos\theta_{y} \end{bmatrix}$$

$$a_x = \cos \theta_x \sin \theta_y$$

$$a_y = -\sin \theta_x$$

$$a_z = \cos \theta_x \cos \theta_y$$

$$\theta_x = -\sin^{-1} a_y$$

$$\theta_y = \tan^{-1} \frac{a_x}{a_z}$$

 $\dot{\theta} = \omega$ ジャイロから求めた姿勢

加速度から求めた姿勢(加速度の値は正規化する)

$$\theta[k] = K_a \begin{pmatrix} -\sin^{-1} a_y \\ \tan^{-1} \frac{a_x}{a_z} \\ 0 \end{pmatrix} + K_g(\theta[k-1] + \omega \Delta t)$$

これがあまりよくない理由ジンバルロック!!!

オイラー角で計算する以上、 ジンバルロックを避けることができない。

クオータニオンにしたい!

クォータニオンにするには?

$$y[k] = K_a x_a + K_g (y[k-1] + \underline{\omega \Delta t})$$
 和ではなく補間 クォータニオンの微分

6軸IMUの相補フィルタ・更新版

[4]の手法を別の観点から導出[5]の実装も参考にしている。

$$y[k]=K_ax_a+K_g(y[k-1]+\omega\Delta t)$$
 ↓回転行列表記、微分に戻す

$$GR_L[k]=K_a{}^Gx_a{}_L$$
 \oplus $K_g({}^GR_L[k-1]+\int_t^{t+\Delta t}G\dot{x_g}_Ldt)$ G:グローバル座標 は逆回転させると 補間を記号で表現 $LR_G[k]=K_a{}^Lx_a{}_G\oplus K_g({}^GR_L[k-1]+\int_t^{t+\Delta t}G\dot{x_g}_Ldt)^{-1}$ $=K_a{}^Lx_a{}_G\oplus K_g{}^GR_g{}_L[k]^{-1}$

↓さらに変形

$${}^{G}R_{gL}[k]^{L}R_{G}[k] = K_{a}{}^{G}R_{gL}[k]^{L}x_{aG} \oplus K_{gI}$$
 ${}^{L}R_{G}[k] = {}^{L}R_{gG}[k](K_{a}{}^{G}R_{gL}[k]^{L}x_{aG} \oplus K_{gI})$

この結果を逆回転させればIMUの姿勢が得られる。

3軸ジャイロをクォータニオンにすると

$$\omega_v = (\omega_x \ \omega_y \ \omega_z)$$
 $<-ジャイロはx,y,z軸周りの角速度 = \omega n$ $= \operatorname{AngleAxis}$ 表現となっている。 $\omega = ||\omega_v||, n = \omega_v/\omega$ $\omega_q = (\sin \omega/2 \ n\cos \omega/2)$

回転クォータニオンの微分

導出過程は[6]がより詳しい。

$$\dot{q}_t = \lim_{\Delta t o 0} (q_{t+\Delta t} - q_t)/\Delta t$$
 $q_{t+\Delta t} - q_t = q_t \omega(\Delta t)_q - q_t$ $= q_t (\omega(\Delta t)_q - I_q)$ <-Iq=(1000) $\omega(\Delta t)_q - I_q = (\cos \omega \Delta t/2 - 1 - n \sin \omega \Delta t/2)$ $\lim_{\Delta t o 0} \omega(\Delta t)_q - I_q = (1 - 1 - \omega n \Delta t/2)$ $= \Delta t/2(0 - \omega_v)$ $\dot{q}_t = \frac{1}{2} q_t (0 - \omega_v)$ <-AngleAxisのままで 計算できる。

ジャイロからの姿勢推定(クォータニオン)

$$\dot{q}_g[k] = \frac{1}{2}q[k-1](0 \ \omega_v)$$
 $q_g[k] = q[k-1] + \dot{q}_g[k]\Delta t$

↓逆回転させると

$${}^{L}q_{gG}[k] = {}^{L}q_{G}[k-1] + {}^{L}\dot{q}_{gG}[k]\Delta t$$

$${}^{L}\dot{q}_{gG}[k] = (\frac{1}{2}{}^{G}q_{L}[k-1](0 \ \omega_{v}))^{-1}$$

$$= -\frac{1}{2}(0 \ \omega_{v})^{L}q_{G}[k-1]$$

(定義上積分は加算、実用上は長さを1に調整)

加速度からの姿勢推定(クォータニオン)(1)

$$Lx_{aG}{}^Gg=La$$
 $Gg=(0\ 0\ 1)^{\Lambda}$
$$\frac{GR_{gL}[k]^Lx_{aG}{}^Gg=\frac{G}{g}=\frac{GR_{gL}[k]^La}{G}$$
 求めたいのはここだけ $R_a{}^Gg=\frac{G}{g}=\frac{G}{g}$ つまり、ジャイロで求めた姿勢で推定した 重力ベクトルのずれを計算している。

$$R(q) = \begin{bmatrix} 1 - 2y^2 - 2z^2 & 2xy - 2wz & 2xz + 2wy \ 2xy + 2wz & 1 - 2x^2 - 2z^2 \ 2xz - 2wy & 2yz + 2wx \end{bmatrix}$$
 $g_{ax} = 2xz + 2wy$
 $g_{ay} = 2yz - 2wx$
 $g_{ay} = 1 - 2x^2 - 2y^2$

加速度からの姿勢推定(クォータニオン)(2)

$$z\leftarrow 0$$
, (z軸周りは推定できない) $g_{ax}=2wy$ $g_{ay}=-2wx$ $g_{az}=1-2x^2-2y^2$ $=1-2(1-w^2)$ $=2w^2-1$ $w=\sqrt{(1+g_{az})/2}$ $x=-g_{ay}/(2w)$ $=g_{ax}/\sqrt{2(1+g_{az})}$ $y=g_{ax}/\sqrt{2(1+g_{az})}$

$$\Delta q_a = \left(\sqrt{\frac{(1+g_{az})}{2}} \quad \frac{-g_{ay}}{\sqrt{2(1+g_{az})}} \quad \frac{g_{ax}}{\sqrt{2(1+g_{az})}} \quad 0\right)$$

gazは1付近の値になることが期待される。

IMUの相補フィルタ(クォータニオン)

$$^{L}q_{G}[k] = {^{L}q_{gG}[k](K_{a}\Delta q_{a} \oplus K_{g}I)}$$

この結果を逆回転させればIMUの姿勢が得られる。

6軸IMUで相補フィルタを使った姿勢推定ができる。

- 線形補間の形に落とせるので実装がシンプルになる。
 - カットオフ周波数から係数を決める。
- クォータニオンでも設計できる。
- 今回紹介した手法の問題点
- 加速度が0=自由落下時に補正が効かない。
- 加速度だけでは重力方向周りの回転はわからない。
 - -> 9軸なら磁気を使うとある程度改善する。
- 位置がわからない。
 - 加速度の二重積分で位置が出るのでは?
 - -> 誤差が蓄積しまくってとても使えない。

参考文献

(Webサイトの閲覧日はすべて2022/3/7)

相補フィルタについて

- [1] 足立修一, 丸田一郎."カルマンフィルタの基礎", 東京電機大学出版局, 2012. 8.1章 IMUの相補フィルタの導出
- [2] めかのとろ. "相補フィルタのしくみを解明してみる【加速度・ジャイロセンサ】"
- https://depfields.com/complementary-filter/

係数だけが紹介されている例

- [3] Pieter-Jan Van de Maele.
 - "Reading a IMU Without Kalman: The Complementary Filter"
 - https://www.pieter-jan.com/node/11

クォータニオンを用いたIMU相補フィルタ

- [4] Valenti, R.G.; Dryanovski, I.; Xiao, J. "Keeping a Good Attitude: A Quaternion-Based Orientation Filter for IMUs and MARGs". Sensors 2015, 15, 19302-19330.
 - https://www.mdpi.com/1424-8220/15/8/19302

実装例

- [5] https://github.com/ccny-ros-pkg/imu_tools クォータニオンの微分の導出
- [6] GANTZ. "クォータニオンの時間微分と角速度の関係の証明"
- https://qiita.com/GANTZ/items/dcd1236402b0c5f88790

ライセンスについて

本文書のライセンスはクリエイティブ・コモンズ表示4.0 CC BY 4.0です。 © 2022 クシナダ機巧株式会社

フォントライセンス

- Rounded M+: M+ FONTS LICENSE
- Computer Modern: SIL Open Font License